

シロクローバに発生する病害について

誌名	茨城県病害虫研究会報
ISSN	03862739
著者名	菅原,毅 村里,正八
発行元	茨城県病害虫研究会
巻/号	7号
掲載ページ	p. 28-30
発行年月	1968年4月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



シロクロパーに発生する病害について

菅原毅・村里正八

本邦では現在シロクロパーの病害として27種類記載されている。筆者らが実施した茨城県におけるシロクロパーの病害の実態調査結果からは、14種類の病害の発生が認められた。これら病害のうち、発病程度が大で重要病害と認められたものは、そばかす病、斑点病、汚斑病、葉銹病、黄斑モザイク病および白絹病である。

ここに本県に発生するシロクロパーの2、3の病害の発生時期と病徴を記して紹介し、何らかの参考となれば幸甚とするものであります。

1 そばかす病 *Leptosphaerulina trifolii*

発生時期：本病は周年発生するが、早春および晩秋の発生が著しく、特に早春の多発は1～2番草の収量を著しく低下させる。いづれも冷涼多湿が被害を甚しくする。

病徴：葉の全面に小さな黒点があたかもコシヨウをふりかけたように数多く現われることである。葉に最もひどく発生するが、葉柄、花梗にもみられ、品種又は系統によつて大型病斑が現われることもある。病斑は葉の表にも裏にも発生するが、はじめは片面に、次第に他面に発生がみられるようになる。

2 汚斑病 *Curvularia trifolii*

発生時期：最も早い発生は5月中旬で夏期は暑さのため蔓延しない。8月下旬になると再び発生するが刈取によつて蔓延を抑えられるようである。しかし9月中旬になると再びはげしく発生する。本病に罹病した葉は霜に弱く、2～3回の降霜で葉は枯れあがり、蔓延は終る。

病徴：葉および葉柄に発生する。本病の病斑は葉先や葉の縁から進展することが多く、初め病斑の色は黄ばんだ大きな病変からはじまり、これが水浸状、半透明となり、やがて扇形又はV字形の褐色～黒褐色の病斑となる。蔓延期には病斑は葉の全面に拡がり、葉柄部をも侵すので葉は黒褐色に枯れ、ねじれて捲きあがる。

3 斑点病 *Cercospora Zebriana*

発生時期：4月下旬頃から発生し始め、梅雨明けには発生が最もひどい。一般には夏から初秋に多くみられるようである。

病徴：おもに葉と葉柄を侵す。葉では初め緑色のあせた丸い小さな斑点が現われる。これはまもなく淡いアズキ色から茶色のやゝ円形の病斑となる。病斑の形は寄主および発病時期によつて異なるので病徴のみによる診断はなかなか難しい。葉柄では初め少しくぼんだ紫褐色の短かい条斑で、これは次第に拡がつてついに全体が黒褐色となる。一般に刈り遅れた草地の古い葉に発生が多いようである。

4 白斑病 *Stagonospora meliloti*

発生時期：本県では、3月下旬にはすでに発生がみられる。5月は最も発生がひどい。夏期の発生はほとんどみられない。秋の発生は9月下旬から10月にかけてみられるが、春よりは少ない。病葉は霜に弱く、2～3回の降霜で、枯れ葉がすこぶる目立つ。

病徴：主として小葉を侵す、病斑は初め蒼白色であるが、まもなく明るい茶色の斑点となる。病斑は初め不整形であるが、次第に円形又は楕円形となる。大きさ2～10mm健全部との境は明瞭である。病斑融合すれば不整形の大型の病斑となり、葉は枯れあがつてくる。枯れた葉片は上方に捲きあがり、しばらくは葉を付けたまゝでいるが、ついに葉柄も枯れて倒れる。

5 葉さび病 *Uromyces trifolii*

発生時期：4～5月から11月頃、5月および9月下～10月にかけて最もはげしく発生する。

病徴：夏孢子堆は葉の両面あるいは葉柄上に現われ、小円形で一様に散在し淡褐色の粉(夏孢子)を飛散する。銹子腔が連つて現われると異常にふくれあがり、その部分から曲がる。冬孢子堆からは暗褐色の粉(冬孢子)を夏の終りから秋にかけて出す。大発生すると葉は枯れあがり、再生に大きく影響する。

6 輪紋病 *Stemphylium trifolii*

発生時期：本病は春から梅雨期にかけて発生し、夏にも若干の発生がみられる。最も被害のひどいのは、本県では5月中下旬である。

病徴：葉に初めナタネ粒ぐらいの小さな丸い淡褐色の斑点が現われ、その周囲は緑色があせる。これが次第に拡がり、直径2～3mm、ときには5～6mmのほぼ円形、楕円形または不定形の淡褐色の病斑となる。病斑の周囲は内部より濃い色の輪で健全部と区切られている。

7 黄斑モザイク病 *Alfalfa mosaic virus*

発生時期：3月中旬頃1番刈を行つた直後に再生した葉に最も目立つ、その後も病徴がみられるが、真夏にはかなり少なくなつてくる。秋になるとまた増加し、特に10月中旬には病徴が判然とする。しかし霜が降りるようになってくると全く認められなくなつてくる。

病徴：初め葉の表面に色のあせた、あるいは逆に色の濃い緑色のかすかなまだらがみえる。これが次第に拡がり、葉脈にさえぎられた不規則な黄いろな縞模様となる。本病では葉がゆがむことはない。しかし他のウイルスとの重複感染のためにゆがんでいる病葉が多くみられる。

8 白絹病 *Corticium rolfsii*

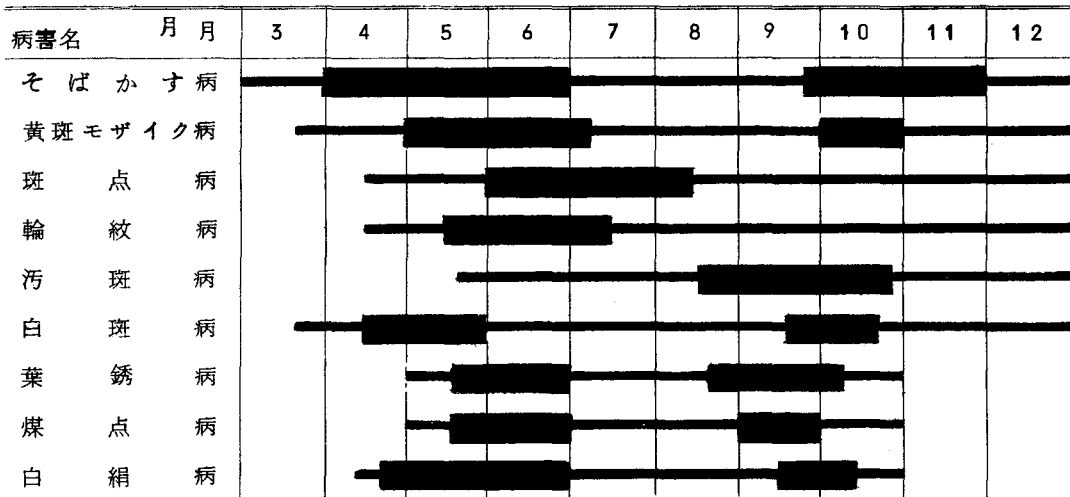
発生時期：梅雨期から秋の初めにかけて発生し、特に梅雨の終りに近づいた雨あがりには急速に広がる。8月に入つて炎天が続くと新しい蔓延はゆるくなるが、高温と乾燥のために被害株の衰弱は倍加されて枯れあがり、夏枯れを助長する。

病徴：ランナーや葉柄の下部に白い絹糸のような菌糸がからまりつき、そのために葉はしおれて枯れる。枯れた葉や葉柄の上には、白色から次第に栗色に変るナタネ粒ぐらいの菌核を形成する。病気に侵された茎葉はやがて全く枯れて消失し、大きな坪枯れとなる。水田から転換した牧草畑にしばしばはげしく発生することがある。
(茨青試)

第1表 茨城県におけるシロクローバに発生する病害の種類と発病程度

病 害 名	発病程度	病 害 名	発病程度
そばかす病	多	蛇の目葉枯病	少
斑点病	多	黄斑モザイク病	多
汚斑病	多	モザイク病	中
輪紋病	少	葉腐病	中
白斑病	少	火ぶくれ病	極～少
煤点病	少	菌核病	中～多
葉銹病	中～多	白絹病	中～多

第2表 各病害の発消長



■ 発生のみられる時期を示す。

■ 発生のもっとも多い時期を示す。